

それは「ミニミニ発表会」と題された、約30分のささやかな時間だった。

昨年12月22日夜、福島県南相馬市のショッピングモール。同市の総合型地域スポーツクラブ「はらまちクラブ」傘下の「みなみそうま遊夢チアリーダー」の小学生8人が、年間を通してただ1度となったダンス発表会を行った。

新型コロナウイルスの感染対策がされた中、家族やクラブボランティア、門馬和夫市長らに練習の成果を見せ、エールを送る。「ゴー！ ファイト！ ウィン！」

来観した大人たちも約40人全員が返礼として順番にコメントをした。「元気をもらいました！」「ありがとうね！」

2005年に始まった同チームは地元の祭りや商工会の催しなどでダンスを毎年10回程度、披露してきた。11年3月の東日本大震災と原発事故後、同年5月に千葉市で開かれたチアリーディングの全国大会にも避難先から集まり、被災地から唯一、参加した。

「地域に元気を」。それがチームの合言葉だ。同市の人口は11年の約6万7千人から、昨年11月は約5万3千人に減少。震災前は20人以上いたチームは十数人を維持しながら、「地元

## 福島から元気の連鎖を

### ゴー！ ファイト！ ウィン！

## 縦横無尽

中小路 徹

Twitterで発信中 @nakakojit

応援団」として存続してきた。

今度は新型コロナウイルスが直撃した。昨年4月の緊急事態宣言で活動休止を経て6月に再開するとメンバーは半分に。定期的に本格的な指導を受けた東京のコーチも呼べなくなった。「地元」のイベントが消え、オフアームもなくりました」とチアを教えるクラブマネジャーの杉岡水佳さん。月4回の練習の意味を考える日々が続いた。

「震災で壊れかけ、辛うじて生きてきたチームが、自然消滅してしまおう」。同クラブの江本節子理事長が持った危機感の中、企画した発表会はメンバー自身も元気になるための起爆剤でもあった。

杉岡さんの長女の水喜さん(小6)はメンバーの一人。「みんなの前で発表できてよかったです」。次女の和佳さん(小2)には初めての発表の場だった。「上手にできて、よかったと思います！」

江本理事長は「この閉塞感へいそくかんは日本中がそうなのかも。激励にきた人が激励される。そんな元気の連鎖が出ればいい」。

新年。再度の緊急事態宣言など空気がさらに沈殿する。

でも、記者もチアのみんなから元気をもらった一人だ。

ゴー！ ファイト！ ウィン！

(編集委員)